

**講演会及び研究集会の記録**

平成21年度FD講演会

**FDの歴史的変遷とカナダ、オーストラリアにおけるFDの取組**

21世紀教育センター高等教育研究開発室 土持ゲーリー法一

アメリカにおけるFD活動の歴史的変遷の概略を述べるとともに、以下のカナダおよびオーストラリアにおけるFD活動の現状と取組みについて、パワーポイントを用いて紹介する。

2009年6月15日～6月20日にかけてUniversity of New Brunswick(カナダ、ニュー・ブルンズウィック)における第29回STLHE(Society for Teaching and Learning in Higher Education)年次大会に出席した。本大会には、カナダはもとより、世界各国からエデュケーショナル・デベロッパーが集まり、大学教育および学習に関する課題について活発な議論が行われた。大会前のワークショップでは、「ラーニング・ポートフォリオ」をテーマに議論すると同時に最新の情報を収集できた。大会は、テーマごとのセッションに自由に参加することができ、ネットワークの構築や情報収集に役立った。全体的な印象としては、NSSE(National Survey of Student Engagement)に代表される学生のエンゲージメントを重視した能動的学習をいかに促進するであった。

2009年7月2日～7月4日にかけてアカデミック・ポートフォリオ先駆的实践校のオーストラリアクイーンズランド大学を視察、アカデミック・ポートフォリオによる教員評価について調査した。クイーンズランド大学は、アカデミック・ポートフォリオの先駆的实践校として多大な実績をあげている。現在、紙媒体から電子媒体に移行中で、アカデミック・ポートフォリオは教員のアセスメントとして有効に機能している。膨大な時間とエネルギーをかけた審査プロセスであるが、大学の質の向上に大きく貢献している。

2009年7月5日～7月11日にかけてオーストラリアのチャールズ・ダーウィン大学で開催された第32回HERDSA年次大会に参加した。大会のテーマは、「学生経験(The Student Experience)」で、HERDSA会長(Professor Shelda Debowski, University of Western Australia)の講演(“Enhancing the Student Experience through Improved Higher Educational Leadership and Practice”)の後、アメリカNSSE(National Survey of Student Engagement)会長(Professor George Kuh, Indiana University)の基調講演(“High Impact Practices: What They Are, Why They Matter to Student Success, and Who Has Access to Them”)があった。参加者は350人で200以上のプログラムが提供された。

**FDの歴史の変遷とカナダ、オーストラリア  
におけるFDへの取組**

弘前大学21世紀教育センター  
高等教育研究開発室  
土持ゲーリー法一  
(ファカルティ・デベロッパー)

**先進4カ国のFD/ED活動の事情**

- 1) 東北大学高等教育開発推進センター編『ファカルティ・デベロップメントを超えて～日本・アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの国際比較』(東北大学出版会、2009年)には、先進4カ国(アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリア)におけるFD/EDの取組が詳細に紹介されている。
- 2) カナダのSTLHE(6月)、オーストラリアのHERDSA(7月)年次大会に参加し、また、昨年10月と今年の10月にはアメリカのPODネットワークに出席。イギリスのSEDA(11月)に参加して帰国したばかりである。そこでの調査を踏まえ、国際比較から見たFD/ED活動の現状について紹介する。



**FDの原点**

- 1) FD義務化が実施されているが、FDの原点は、アメリカのPODネットワーク(The Professional and Organizational Development Network in Higher Education, POD)の1974年設立時まで遡る。
- 2) これは、全米のFD担当者のための高等教育における教授・学習支援に関する最も古い専門職組織であり、現在、「学習活動と教授活動の改善に取り組む実践家と指導者を育て、支援する」(POD、2008年)ことを目的としている。

**PODネットワーク年次大会**

- 1) 2006年現在、アメリカとカナダを中心に25カ国から2000人以上のメンバーから構成されている。1976年当時は、わずか20人であった。2009年度年次大会は、10月28日～11月1日にかけてテキサス州ヒューストンで開催された。詳細は、中野京子先生からご報告していただく。
- 2) 本報告では、カナダ(STLHE)とオーストラリア(HERDSA)のFDの取組を中心に紹介する。

**アメリカの高等教育における歴史的展開(1)**

- 1) 10年ごとのアメリカの高等教育の変化の過程
  - (1) 1960年代は、学者時代と呼ばれ、研究が重視された。
  - (2) 1970年代は、教員時代と呼ばれ、教育が目目され、学生の授業評価に焦点が当てられた。
  - (3) 1980年代は、ディベロパー時代と呼ばれ、財団による支援のもとでファカルティ・デベロップメントが目目された。
  - (4) 1990年代は、学習者時代と呼ばれ、学生の学習に焦点が当てられた。
  - (5) 2000年代は、ネットワーク時代と呼ばれ、ネットワークによるコラボレーションがはじまった(注: PODは、1974年のスタート時点からネットワークの重要性を強調し、PODネットワークという名称が使用された)。

**アメリカの高等教育における歴史的展開(2)**

- 2) アメリカにおける高等教育関連組織の発展過程
  - (1) 1969年～2005年 アメリカ高等教育協会(AAHE、現在はAAHEA)
  - (2) 1972年 HERDSA(オーストラリア)の設立
  - (3) 1973年～1974年 POD ネットワーク(アメリカ)設立
  - (4) 1977年 NCSPOD設立
  - (5) 1981年 STLHE(カナダ)設立
  - (6) 1980年代 SEDA(イギリス)の「草の根活動」の萌芽
  - (7) 1993年 ICED(国際教育開発コンソーシアム)設立

**アメリカの高等教育における歴史的展開(3)**

- 3) FD概念の変遷過程
  - (1) ファカルティ・デベロップメント
  - (2) プロフェッショナル・デベロップメント
  - (3) インストラクショナル・デベロップメント
  - (4) パーソナル・デベロップメント
  - (5) オーガニゼーショナル・デベロップメント
  - (6) アカデミック・デベロップメント
  - (7) エデュケーショナル・デベロップメント

### アメリカの高等教育における歴史的展開(4)

- 4) 高等教育に関する著書の動向
- (1) 1951年あるいは1969年 *Teaching Tips* by McKeachie (邦訳『大学教授法の実践』(玉川大学出版部、1984年) (備考:名古屋大学『成長するティップス先生』)
  - (2) 1975年 *Toward Faculty Renewal* by Gaff
  - (3) 1975年 *A Handbook for Faculty Development* by Bergquist and Phillips
  - (4) 1976年 *Accent on Learning* by Cross
  - (5) 1980年 *New Directions for Teaching and Learning*
  - (6) 1981年 *To Improve the Academy*
  - (7) 1987年 *Seven Principles of Good Practice* by Chickering and Gamson (備考:特色GP)
  - (8) 1990年 *Scholarship Reconsidered* by Boyer (邦訳『大学教授職の使命〜スカラーシップ再考』(玉川大学出版部、1996年))
  - (9) 1992年 *Principles of Reflective Practice* by Argyris and Schon
  - (10) 1995年 *"From Teaching to Learning"* by Barr and Tagg
  - (11) 1999年 *Classroom Assessment Techniques* by Angelo and Cross
  - (12) 2000年 *"Fostering a Scholarship of Teaching and Learning"* by Shulman
  - (13) 2002年 *Learner-Centered Teaching* by Weimer
  - (14) 2006 *Creating the Future of Faculty Development* by Sorcinelli et al

### アメリカの高等教育における歴史的展開(5)

- 5) 名称の変遷過程
- (1) コンサルテーション(ティーチング・プロフェッショナルあるいはパーソナル)→自己管理開発を促進するコラボレーション
  - (2) セミナーやワークショップ→研修や長期プログラム
  - (3) 新任教員研修→新任教員のためのメンタリング・プログラム
  - (4) TA 研修→認定書プログラム
  - (5) 助成金や受賞→全国認定プログラム
  - (6) プック・サークルラーニング・コミュニティ
  - (7) 授業研究 (Classroom Research)→ティーチングやラーニングのためのスカラーシップ (Scholarship of Teaching and Learning)
- (出典: Marilla D. Svinicki, "Introduction to Educational Development," 2009 Institute for New Faculty Developers by the Collaboration for the Advancement of College Teaching & Learning, Co-sponsored by POD, June 21, 2009-June 26, 2009, St. Paul, Minnesota)

### パラダイム・シフト ～教授パラダイムから学習パラダイム～

- 1) 「教授パラダイム (Instruction Paradigm)」から「学習パラダイム (Learning Paradigm)」へ移行および学習成果 (Learning Outcomes) による出口管理の強化。
- 2) 従来の「教授パラダイム」では、授業を改善することや教育課程を改善することに力点が置かれ、その方法として授業を行う教員の資質の改善 (FD) に力が注がれた。

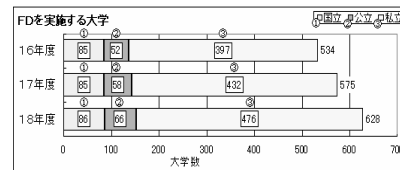
### 「学習パラダイム」

- 1) 「教授パラダイム」を批判して、大学の目的は学生の学習を生み出すことであり、教育課程や授業の改善は手段に過ぎないと指摘。そして、学生の学習を生み出すことを目的とした「学習パラダイム」にもとづく大学教育の改善を提唱した。
- 2) 次頁の写真は、提唱者のひとり、ジョン・タグ教授と一緒に撮影したものである。彼は、2003年に、「学習パラダイム」にもとづく大学教育改善を提唱し、『ラーニング・パラダイム・カレッジ (The Learning Paradigm College)』という著書を刊行した。彼は、PODネットワーク共催の新人のためのファカルティ・ディベロパー研修の講師の一人であった。



### FDを実施している大学数

平成18年度現在、628大学(約86パーセント)の大学が実施している。



### なぜ、FD義務化

文科省は、『大学設置基準』の一部改正して、FD義務化を実施した。確かに、数値的には、多くの大学で実施されているが、内容が不十分との認識である。この改正により、大学が授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施する(第25条の3関係)、いわゆるファカルティ・ディベロップメント(FD)が義務化された。中央教育審議会大学分科会「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」は、FDを「教職員の職能開発」と位置づけている。

### エデュケーショナル・ディベロップメント(ED)

- 1) 日本のように、大学が組織的に実施する場合、FDだけで良いのだろうか、また、このような名称が適切なかどうか再検討する必要がある。むしろ、教員のFDのみならず、大学全体の教育環境を改善・向上するためにカナダで用いられるエデュケーショナル・ディベロップメント(ED)が実態に近い。
- 2) FDに関する国際的な組織であるICEDも、EDのためのインターナショナル・コンソーシアムとなっている。

## FDの4つの領域

- 1) FDには、教授・学習開発は教授過程に焦点をおいたインストラクショナル・ディベロップメント、学習プログラムに焦点をおいたカリキュラム・ディベロップメント、機関内の資源配分を含めた教育活動を最適化するオーガナイゼーショナル・ディベロップメント、教員のキャリアに焦点をおいたプロフェッショナル・ディベロップメントの4つの領域があり、全体的な取り組みが重要であり、これらを含めた用語として、オーストラリアとイギリスではアカデミック・ディベロップメント、北米ではファカルティ・ディベロップメントが使われるが、全体的な観点が弱いので、エデュケーショナル・ディベロップメントの用語が使われるべきである、と昨年来校したリン・ティラーは主張している。

(注:詳細は、『ファカルティ・ディベロップメントを超えて』(東北大学出版会、2009年3月)を参照)

## FD/EDの概念



## なぜ、カナダではFDではなく、EDなのか

1. 昨年、FD講演会で基調講演をしたカナダのダルハウジー大学のティラー博士は、エデュケーショナル・ディベロップメント(ED)の用語がカナダで好まれる理由として、ファカルティ・ディベロップメント(FD)の表現には、「修正的(Remedial)」な意味合いが含まれ、動機づけとしては弱く、しかも、否定的に受け取られるために、戦略的にも定着しにくく、侮辱的な意味合いがあるとして、教員から攻撃され(Offensive)たり、敬遠されたりする。すべてを反映させるためには、ファカルティだけではなく、物理的環境(Physical Environment)、さらには大学政策にまで及ぶ必要があると述べている。
2. 2009年カナダのSTLHE年次大会が6月に東部ニュー・ブロンズウィックで開催され、参加した。次頁が冊子の表紙写真である。



## 共通テーマ

- 1) 今年の年次大会には、500人以上のカナダ、アメリカ合衆国から海外の参加者があった。
- 2) 毎年、STLHE年次大会の参加者は、意見を出し合って、研究調査結果を共有し、古くて新しい同僚に接する良い機会である。
- 3) 今年の年次大会テーマ“Between the Tides”に示されるように、高等教育が直面している教育の問題や難しさについて活発に議論した。

Scholarly Teaching から  
Scholarship of Teaching へ

- 1) カナダで注目されるのは、Scholarly Teachingに代わるScholarship of Teachingの概念である。Scholarly Teachingは、効果的な教育に焦点を置くもので、先の「教授パラダイム」と同じで考えである。Scholarship of Teachingは、学生の学習に焦点を置き、学習成果と学習過程に重点を置く「学習パラダイム」のことである。アーネスト・ボイヤーの“Scholarship of Teaching and Learning”の影響によるものである。



## コンセプト・マップ

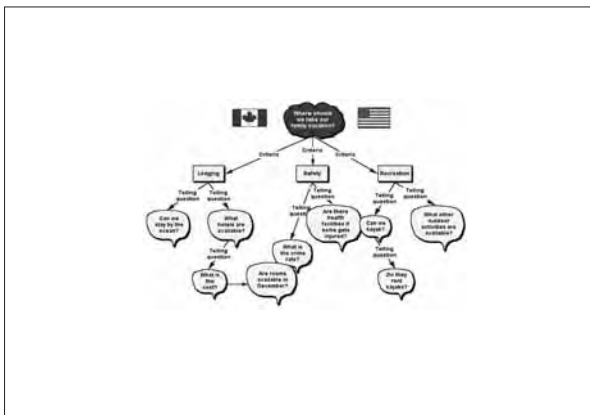
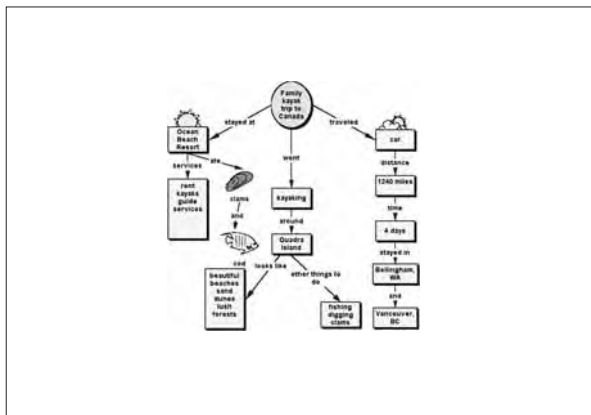
- 1) 2009年6月カナダのSTLHE (Society for Teaching and Learning in Higher Education) 年次大会で、ラーニング・ポートフォリオに関するワークショップ(Alice Cassidy, “Learning Portfolios: Creative Connection Between Formal and Informal Learning”)に参加し、コンセプト・マップ (Concept Map) について学んだ。副題も、正規学習と正規外学習とを効果的に繋げる内容であった。たとえば、以下の図表のように、“Happiness”のコンセプトをリンクさせることで、互いの繋がりが明確になり、より内容を深めることができる。



**学習実践記録としての活用**  
**学びの「見える化」～コンセプト・マップ**

1) コンセプト・マップは、マインドマップとの共通点も多く、その理論は1980年代に見られるようになった。これは、ラーニングの概念(コンセプト)を繋ぐチューター(役割)を果たすものである。鍵的なコンセプトを中心に、各コンセプトに矢印をつけて、どのように繋がるかを書かせるもので、ブレインストーミングとしても適している。コンセプト・マップは、多様な考えを「見える化」する強力な教育ツールである。伝統的には、最上位に主要なボックスを置き、その下に階層した従属ボックスから成り立つ。すべてのボックスは矢印(あるいは線)で繋がりが、各コンセプトの簡潔な情報が含まれる。コンセプト・マップを用いることで、学生の思考を促したり、創造的な力を伸ばしたりすることができる。

2) 学生に問いかけ、コンセプトを具体化する。



**HERDSA: 学生の経験**

1) HERDSA大会も表題が示すように、「学生の経験」に焦点が当てられた。

2) アメリカのインディアナ大学にあるNSSE (National Survey for Student Engagement)は、世界各国に影響を与え、学生の教育活動への能動的関与が注目され、カナダ、オーストラリアでも同じような調査が行われている。

3) この大会でもNSSEの会長George Kuhの基調講演が行われた。



アカデミック・ポートフォリオ

- 1) 大学評価・学位授与機構の影響もあって、最近(2009年8月)、ティーチング・ポートフォリオに代わって、アカデミック・ポートフォリオが脚光を浴びている。これは、ティーチング・ポートフォリオによる教育業績評価に加えて、研究および社会貢献の二つの評価を加えたもので、日本の大学の実情にも適している。
- 2) 昨年(2008年10月)にピーター・セルディンのアカデミック・ポートフォリオの著書が刊行され、全米でも新しい教員業績評価として注目され、大学評価・学位授与機構によって玉川大学出版部から2009年5月に日本語に翻訳された。
- 3) しかし、オーストラリアは約15年も前から導入され、優れた成果をあげている。とくに、クイーンズランド大学の取り組みは、1997年から実施されている。

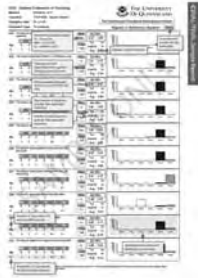
クイーンズランド大学教員の身分・職務内容

- 1) オーストラリアの大学は、ほとんどが州立大学であるため、教員の身分・雇用条件などの大枠は、全国的に同一であり、教員はAからEランクまで5段階の等級に位置づけられ、それぞれに対応する職位が決まっている。Aランクは講師以下、Bランクは講師、Cランクは上級講師、Dランクは准教授、Eランクは教授である。
- 2) 職務内容によっても区分が設けられ、研究専任教員(RO)、研究・教育担当教員(T/R)、教育重点教員(T/F)に種別化されている。RO教員は、文字通り、研究に専念する教員で教育担当の義務はない。主に、研究重点大学に配置される。T/F教員は、教育活動を重点的に担当する教員で、研究活動は基本的に求められない。T/R教員は、教育と研究の両方が職務内容に含まれる。職務内容の詳細は、次ページの図表のようである。
- 3) アカデミック・ポートフォリオの教育・研究・社会貢献の評価基準が明確に示され、教員は自らが望むカテゴリーから評価を受けることができるシステムになっている。

図表 見直し版「オーストラリアの大学における Academic Development」の表(2009年)  
 東北大学高等教育開発センター編「アカデミック・ポートフォリオ」を基に、日本語版「アカデミック・ポートフォリオ」を編纂した。オーストラリアの実情に即した。  
 (東北大学出版部、2009年)140頁

クイーンズランド大学「学生による授業評価」

- 1) クイーンズランド大学の評価はシステム化されている。たとえば、次頁の「学生による授業評価」(TEVAL)は、個々の講師およびチューターの授業改善そして契約および昇任審査を支援する目的のためである。
- 2) 調査結果は、評価対象の講師およびチューターに報告される。比較のために標準値および基準が示され、統計的に分析される。同データは、契約や昇任審査に求められる。
- 3) 現在、オンラインを利用したフォームを優先させている。
- 4) 詳細は、『21世紀教育フォーラム』第5号(2010年3月)を参照。



まとめ  
 Scholarship of Teaching & Learning

- 1) 冒頭で説明したように、1990年にポイヤールが「スカラーシップ再考」(Scholarship Reconsidered) (邦訳『大学教授職の使命～スカラーシップ再考』(玉川大学出版部、1996年)を刊行されて以来、学問に対する考えが大きく変わり、大学教員が学習に焦点を当てるティーチングへと変化した。すなわち、「教授パラダイム」から「学習パラダイム」へのシフトである。